

## 巻頭言

「筋を通す」しなやかさを学ぶ——社会構想学の着想と展開

齊藤先生と野口先生が2021年3月にご退職される。齊藤先生は1988年に、野口先生は2001年に中京大学社会学部に着任された。私が同学部に着任したのは2000年である。専門分野の違う私は、約20年の間、両先生と主に学部関係の仕事でご一緒させていただいた。

「両先生に共通して、感心させられた点があるな。何て言えばいいだろう」としばらく考えてみた。

「筋を通す」

ああ、まずはこれだなと自分で納得した。私は3年半だけ企業で働いて取締役会の事務局等の仕事をしたが、そこでの議論と、本学部の教授会での議論は当然ながら大きく違っている。取締役会では利益が出るか否かが専ら中心だが、教授会はそうでない。

両先生は、教授会で議論が迷走しそうになったときにも、学問の根本に帰り、筋を通すことを考え抜こうとされた。学問としてあるべき姿は何か？我々は学者として何を目指し、何を教えるべきなのか？を根本から考えようという一貫した姿勢。それは両先生にとってはあまりに自然で当たり前の姿勢なのだろう。だが、企業での会議しか経験のなかった私には新鮮であり、自分もそうなりたいと願ったものである。

さらに感心したのは、その先の姿勢である。がむしゃらに無理矢理「筋を通す」ことは、慎重に避けるのだ。筋は筋として考え抜き、高い目標は明確にしておく。だが、実際に現実に働きかけるときは、現実と目標との距離を正確に見定めた上で、少しでも現実を目標に近づけられる実行可能な戦略を探ろうと常に努力されてきた。高い目標を掲げながら、現実を少

しでもよくするために考えながら行動する「しなやかさ」には、いつも関心させられた。

この「しなやかさ」はどこから来るのか。おそらく両先生が、人類学、社会福祉学の中で、現場にこだわり抜く、徹底したフィールドワーカーを目指されたことから来たのではないかと拝察する。

ここまで書いてきて、2015年度からの4専攻制で学部教育の中核とした「社会構想学」の着想は、両先生の学問への姿勢を学ぼうとして、生まれたことに気づいた。「社会構想学」は3年生春学期の必修科目である。学生はどんな社会に生きていきたいかという目標をまず考え、そのために実際に自分たちは何を日々していけばいいのか、を約6名の班に分かれて徹底的に議論する。

「社会構想学」の着想は当時将来構想委員長の私から提案したが、実際の講義内容の具体化は両先生と辻井先生と私の4名で行われた。両先生はここでも様々なアイデアを出された。特によいアイデアだと私が今考えているのは、約6名の班の構成を、必ず4専攻の学生を混じり合わせ、他の専攻の学生と議論できる形にしたことである。その結果、すべての学生は自分の高い目標をまず設定した上で、他者（特に他専攻学生）と議論しながら、どのようにすれば共通の目標を設定できるかという課題に直面する。他者も納得できる「筋の通し方」を、議論しながら身をもって学ぶのである。その上で、自分が専攻で学んできた発想から、現実に対してどのような日々の働きかけが実際にできるかを改めて考える。両先生の姿勢から学ぼうという願いが、「社会構想学」には実は込められていたことは明らかだろう。両先生の発想と行動様式を学び考え議論しようという我々の内なる願いは、通奏低音のように「社会構想学」の着想から展開中の今に至るまで響き続けてきたのである。具体的には、齊藤先生は学生諸君に各専攻で学んだ概念を確認させた上で、グローバル市民を育む長期的な大学構想を議論させた。野口先生は災害福祉の大きな見取り図を示し、実際に避難所をどう設営、運営するかの議論を促した。

また、両先生は学部長、研究科長を歴任され、本学部の発展のために尽くされた。本学部の使命は「人がいきるつながりを創る」だが、それには地域との連携も欠かせない。斉藤先生は、内閣府、豊田市と連携し豊田市の地域課題解決に挑戦する講義を続け、立ち上げた「保見団地プロジェクト」の中で学生諸君に現場でいろんな立場の人と話し考え抜く大切さを教え続けられた。野口先生は学生のための演習室等の拡充に尽力され、恵まれた環境でゼミを行うことを可能にされた。私が現在の4専攻への改革構想を教授会で説明する際に全力を集中できたのは、その説明の後は教授会の書記を野口先生に代わっていただいたおかげであった。

本当にありがとうございました。いつまでもお元気で、これからも「筋を通す」しなやかさを我々に学ばせてください。

現代社会学部長 大岡 頼光